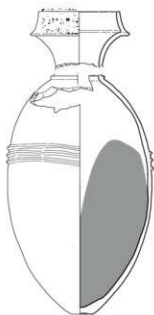


賀来中学校遺跡4

第5次調査

—仮設校舎設置のための造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2013

大分市教育委員会

賀来中学校遺跡4

第5次調査

—仮設校舎設置のための造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013

大分市教育委員会

序 文

本書は、賀来中学校仮設校舎設置のための造成工事に伴い、平成23年度に実施しました埋蔵文化財発掘調査の成果を収録したものです。

本市では、子どもたちにとってよりよい教育環境の創造をめざし、学校や地域の実情に応じた小中一貫教育を推進しています。

賀来小・中学校は、平成18年度に小中一貫教育モデル校に位置づけられ、平成19年度より大分市小中一貫教育校として開校いたしました。義務教育9年間を見通し、子どもたちの発達段階に応じたきめ細かな教育を特色としております。

学校敷地内に所在する賀来中学校遺跡は、昭和55年度から数回の発掘調査が行われており、弥生時代後期、古墳時代前期の集落跡、中世前半期の溝跡などが発見されています。

今回の第5次調査では、弥生時代後期後葉の小児棺と考えられる土器埋設遺構や溝跡が見つかっています。これまでの周辺の調査所見などを踏まえますと、第5次調査地点は、当時墓域として利用されていたことが考えられ、当時の集落の様子をうかがい知ることができる貴重な成果を得ることができました。

本書が郷土の歴史学習に際して小中学校の児童・生徒や市民の皆様にも広く活用されることを願うとともに、調査等にご協力いただきました地元の方々、関係各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成25年3月15日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例 言

1. 本書は、大分市教育委員会が大分市大字賀来において、平成23年度に、仮設校舎設置のための造成工事に伴い調査を実施した発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、賀来中学校・学校施設課の全面的な協力のもと、平成24年1月31日から平成24年2月7日まで大分市教育委員会文化財課が実施した。
3. 発掘調査は、塩地潤一・奥村義貴・小野綾夏が担当した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、上記の発掘調査担当者が行った。
5. 遺物の洗浄・接合・注記作業は小野・奥村・佐藤麻理子が行った。
6. 遺物の実測図作成・拓影・製図作業は、雅企画有限公司（業務責任者 阿部みゆき）が委託を受けて行ったほか、一部については、佐藤麻理子が行った。
7. 遺物の写真撮影は、雅企画有限公司が大分市教育委員会の委託を受けてデジタル写真撮影を行った。
8. 本書の執筆は、佐藤道文（第1章・第4章）・佐藤麻理子（第2章・第3章）が行った。
9. 本書の編集は、株式会社 双林社（業務責任者 森一博）が委託を受けて行ったほか、佐藤道文・佐藤麻理子が行った。
10. 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に収蔵・保管している。

凡 例

1. 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
①SD：溝跡・溝状遺構 ②SX：性格不明遺構・土器埋設遺構・埋納遺構 ③表土・遺物包含層・整地層
2. 本書に用いた方位はすべて座標北（G. N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系（北緯33°0′、東経131°0′）のX・Y座標を基点として表記している。
3. 本書に掲載した遺構配置図（遺構の新旧関係を記録した図面）の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
4. 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
遺物の法量の内、器高と口径、底径は以下のとおり計測している。
器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
口径：上記の状態で、口縁端部外縁の最大径
底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
5. 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
 1. 遺物平面の稜線と調整の変換点……………実線
 2. 調整が同じでその単位が分かるもの……………長破線
 3. 付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの……………アミ掛け
 4. 赤色塗彩……………アミ掛けM30
5. 本書に用いた出土土器の分類は以下の文献による。
大分市教育委員会 2010『下郡遺跡群Ⅷ』大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構	7
第4章 総括	12

図版目次

第1図 地形分類図 (1/25,000)	2
第2図 賀来中学校遺跡位置図 (1/600,000)	3
第3図 調査区配置図 (1/2,500)	3
第4図 周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)	4
第5図 遺構配置図 (1/250)・土層模式図	6
第6図 個別遺構実測図 (1/20)	7
第7図 SX005・010出土遺物実測図 (1/4)	9
第8図 SD015・025・SX030・表土・確認調査 出土遺物実測図 (1/4)	10
第9図 賀来中学校遺跡調査区全体配置図 (1/1,500)	13

表・写真図版目次

第1表 出土遺物観察表	11
写真図版1	14
賀来神社から賀来小中学校を望む(北東より)	
調査区遠景(北より)	
調査区全景(東より)	
調査区全景(北より)	
SD020北壁土層検出状況(南より)	
SD001南壁土層検出状況(北より)	
SX005・010・SD020検出状況(西より)	
SX005・010検出状況(南より)	
写真図版2	15
SX005検出状況①(東より)	
SX005検出状況②(南より)	
SX010検出状況①(西より)	
SX010検出状況②(東より)	
SX005鉢埋設状況(東より)	
SX005完掘状況(南より)	
SX010完掘状況(南より)	
SX005・010完掘状況(南より)	

写真図版3	16
SX030検出状況(北より)	
SX030遺物出土状況(北より)	
SX030下壘埋設状況(北より)	
SX030上壘内側目ばり状況(北より)	
SX030完掘状況(北より)	
確認調査 調査区遠景(西より)	
確認調査 3トレンチ土器埋設状況(東より)	
確認調査 4トレンチ南壁環濠跡土層写真(北より)	
写真図版4	17
第7図2	
第7図3(内面)	
第7図3	
第8図1	
第7図4	
第8図2	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経過

賀来中学校遺跡第 5 次調査は、賀来中学校の校舎北側の敷地を土地所有者から寄贈を受け、寄贈された土地（以下、寄贈地とする）に仮設校舎を設置するための造成工事に伴い実施したものである。寄贈地は、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当することから、仮設校舎設置にあたり遺跡の有無について事前に確認調査を行ったところ、水田層のほぼ直下で遺構が確認された。そのため、遺跡の取り扱いについて文化財課、学校施設課並びに建築課で協議を行ったところ、仮設校舎設置に際しては、盛土整地の措置を執り遺跡保護を図ることで 3 者の合意が成された。よって、発掘調査については実施しないこととなった。

寄贈地と賀来中学校敷地内の間には水路が延びていたが、造成工事にあたり既存水路の移設が計画された。工事計画図面と確認調査成果を照合したところ、掘削深度は遺構面まで達しない計画であったが、遺跡保護を確認するため、工事に際しては文化財課職員の立会の下、施工する所見を施工業者に伝えた。立会日当日、文化財課職員が現地に向かったところ、掘削工事が当初の計画より深くなっており、土器埋設遺構や溝状遺構等が大きく削平され表出した状況であった。そのため仮設校舎設置工事の事業主体である学校施設課に状況報告を行い、工事を一時中断し、緊急調査を実施することとなった。

調査区は水路移設部分を原因とするため、幅約 2m、総延長約 71m の平面が長細い L 字状トレンチを呈し、調査面積は約 140m² を測る。調査は平成 24 年 1 月 31 日から実施し、遺構の掘り下げ及び記録作成を行い、同年 2 月 7 日に終了した。

第 2 節 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬 事務局 大分市教育委員会 文化財課

調査体制（平成 23 年度）

文化財課

教育部参事兼文化財課長 玉永 光洋

参事 福田 誠一 塔鼻 光司

主幹 坪根 伸也

埋蔵文化財担当班

専門員（班長）池邊千太郎 専門員 塩地 潤一

主任 佐藤 道文 主事 朝川 貴俊

嘱託職員 奥村 義貴 小野 綾夏

学校施設課

教育部次長兼課長 渡邊 末己

主幹 羽田 尚史

管理担当班

主査（グループリーダー）利光 優子

施設担当班

主幹（グループリーダー）森 弘

主査 田崎 勝彦

整理体制（平成 24 年度）

文化財課

課長 福田 誠一

主幹 坪根 伸也

埋蔵文化財担当班

専門員（班長）高品 豊 専門員 塩地 潤一

主査 佐藤 道文 主事 朝川 貴俊

嘱託職員 佐藤麻理子

学校施設課

教育部次長兼課長 渡邊 末己

主幹 羽田 尚史

管理担当班

主幹（グループリーダー）利光 優子

主査 広瀬 正祉

施設担当班

主幹（グループリーダー）服部 敏明

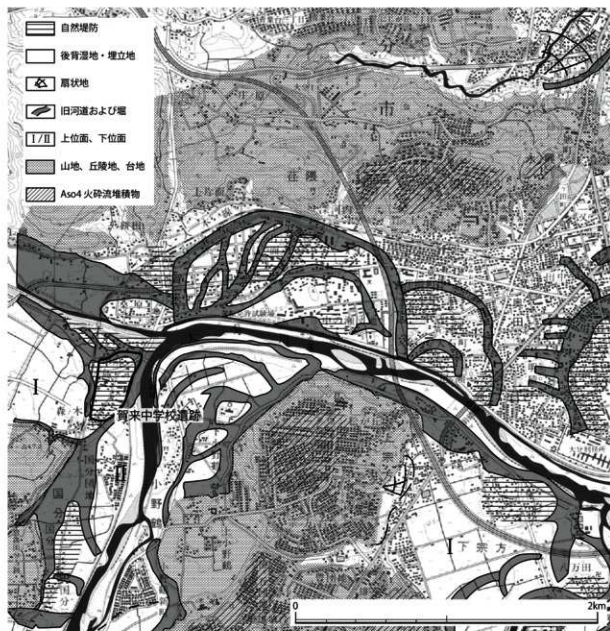
主査 田崎 勝彦

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分市が位置する大分平野は、九州北東部に位置し、北側に別府湾を望む。大分平野は、東側に佐賀関山地、南方には霊山山地、西方には国東半島の両子山から阿蘇山へ続く、第四紀火山列にあたる高崎山がある。平野の内部は、新生代第三紀中新世から第四紀の地層である豊洲累層群が広く分布しており、これらが丘陵地・台地・低地をつくり、いわゆる大分平野を形成している。中央部には大野川が北流し、平野西部には由布岳を水源とする大分川が東流のち北流し、別府湾に注いでいる。その流域には河岸段丘が発達し、河口部には三角州が展開する。

大分川は賀来中学校遺跡が位置する大分市北西部の形成にかかわる河川である。大分川下流には沖積低地が広



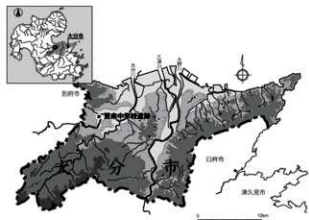
第1図 地形分類図 (1/25,000)

がっており、これを大分川デルタとよぶ。大分川デルタは微地形からみると、東西に延びる上野台地により二分されている。下流側には三角州が展開し、調査地周辺が含まれる上流側には自然堤防の卓越する地帯が広がっている。

第1図は、調査地周辺の地形分類図である。調査地は、大分川とその支川である賀来川の合流地点に近い自然堤防上に位置する。丘陵地や台地に囲まれ、大きく蛇行した大分川左岸の氾濫原にあたり、周辺には旧河道や後背湿地が複雑に展開している。自然堤防は洪水を繰り返す河川の下流部に主に発達し、氾濫原において、周辺より水はけがよく乾燥していること、また微高地ということから洪水氾濫という災害への備えという点でも集落形成に適していたようである。また、大分川と賀来川という本支川の交わる地であることから、水上交通の要衝であったことも考えられる。

第2節 歴史的環境

賀来地区周辺では、後期旧石器時代から人々が居住していた。賀来中学校遺跡の北側に広がる金谷迫丘陵から東へ延びる庄ノ原台地、及び西側の河岸段丘上にある野田山周辺に遺跡分布が認められる。縄文時代の遺跡としては、金谷迫丘陵上の金谷迫遺跡から縄文時代早期前半の無紋土器・条痕文土器、チャート製石器が出土した。そこから賀来川を挟んだ南側の台地上の野田山遺跡では、炉穴や集石が検出され、条痕文土器が出土している。また、同じ台地上にある下黒野遺跡でも、集石を検出しており、条痕文系土器・押型文土器が出土している。弥生時代早期では、下黒野遺跡が挙げられる。大分県の刻目突帯文土器の標識遺跡である。弥生時代中期以降の遺跡としては、台地上にある雄城台遺跡と尼ヶ城遺跡から竪穴建物跡が検出され、後漢鏡の破片が出土している。特に雄城台遺跡からは、県指定文化財である巴形銅器も確認されている。また、川沿いの微高地でも集落が営まれるようになり、周辺地には賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡・賀来中学校遺跡が展開している。賀来西遺跡からは、弥生時代中期の竪穴建物跡が検出された。賀来中学校遺跡では、これまでの調査で弥生時代後期から古墳時代初頭とみられるV字形の溝を有する環濠集落跡と、小児用と推定される壺棺墓群が検出されており、環濠集落内において居住域とは別に墓域が形成されていた可能性を示唆している。同様に宮



第2図 賀来中学校遺跡位置図 (1/600,000)



第3図 調査区配置図 (1/2,500)



第4図 周辺主要遺跡分布図 (1/25,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	賀来中学校遺跡	弥生・中世	14	鐘ヶ丘湖崖墓	中世	27	井出ノ上横穴墓群2	古墳
2	賀来西遺跡	弥生・古墳・中世	15	千代丸古墳	古墳	28	井出ノ古墳	古墳
3	賀来条里跡	古代・中世	16	宮苑キリシタン墓	江戸	29	上片面横穴墓群	古墳
4	中尾古墳	古墳	17	宮苑遺跡	中世	30	丑殿古墳	古墳
5	中尾古墳2号墳	古墳	18	中村遺跡	弥生	31	上片面遺跡	縄文
6	宮苑井ノ口遺跡	弥生・古墳	19	石御堂横穴墓群	古墳	32	庄ノ原片面遺跡	縄文
7	下黒野遺跡	旧石器ほか	20	餅田古墳群	古墳	33	蓮葉山古墳	古墳
8	野田山遺跡	旧石器ほか	21	中尾遺跡	古墳	34	万寿山古墳群	古墳
9	野田遺跡	旧石器ほか	22	小原横穴墓	古墳	35	庄ノ原遺跡	旧石器ほか
10	国分台遺跡	縄文	23	机帳原遺跡	縄文	36	餅田横穴墓群	古墳
11	六重原遺跡	縄文・古墳	24	金谷迫古墳	古墳	37	田崎遺跡	弥生・古墳
12	国分遺跡	古代	25	金谷迫丸山城跡	中世	38	田崎古墳群	古墳
13	豊後国分寺跡	古代	26	井出ノ上横穴墓群1	古墳	39	椿ヶ丘横穴墓群	古墳

苑井ノ口遺跡でも、小児用甕棺墓群を伴う集落跡が発見されており、弥生時代中期から古墳時代にかけての集落の変遷をみることができる。古墳時代には、賀来地区周辺の大分川沿いの台地上で多数の古墳が造営される。北側の河岸段丘面である庄ノ原台地には蓬萊山古墳が築造される。主体部には箱式石棺をもっていたといわれ、4世紀中頃から後半の前方後円墳と考えられる。古墳時代後期には、庄ノ原台地裾部に玄室内に家形石棺が置かれる丑殿古墳、賀来川左岸の丘陵地である宮苑には大分平野で唯一の装飾古墳である千代丸古墳があり、ともに横穴式石室構造である。そして台地の裾部には井出ノ上・上片面・餅田など横穴墓群が多数分布している。古代の遺跡としては、本遺跡に隣接し賀来条里跡が展開している。賀来条里跡南の大分川左岸の河岸段丘上には、聖武天皇の勅により「好所」として豊後国分寺が建立された。発掘調査では梵鐘造遺構などが検出され、尼寺の存在を示す墨書土器も出土している。現在は国史跡豊後国分寺跡として整備されている。中世初めには、由原宮領の荘園として賀来荘が成立し、12世紀中頃には地頭職として賀来氏が一帯を掌握する。その賀来氏の居館が、賀来中学校北側に隣接する現在の賀来神社の社地一帯であるとの伝承がある。賀来中学校遺跡の過去の調査では、12世紀後半の土師器や輸入陶磁器を伴う溝状遺構が検出されており、関連が注目されている。また、北西方向の丘陵地上に位置する宮苑遺跡では、13世紀代の名主または地頭職の居館跡とされる遺構が検出されている。

江戸時代になると、当地は府内藩領となり、藩主日根野吉明の主導により賀来川対岸に初瀬井路が開削され、賀来周辺では水田開発が進む。中世大友氏の所領となって以降、江戸時代には歴代藩主により保護されてきた柞原八幡宮、摂社である賀来神社は、明治維新まで賀来善神玉宮と呼ばれていた。祭神である武内宿禰命は、平常は柞原八幡に仕え、太陰暦八月朔日より十一日の間のみ還幸する。この11日間が祭礼期間とされ、賀来神社境内には「賀来の市」とよばれる市がたつた。「府内藩記録」によると、宝暦2年に小屋掛瀬が出された記録が残っており、この頃より近隣の農民や府内の商人による出小屋がたつようになる。全国からも商人が集まるようになり、昭和初め頃までは地方の交易場として機能していたようである。その後長い年月のうちに賀来の市は祭りの要素を強めてゆき、現在も地域住民に親しまれている。また6年に一度、卯・酉の年には祭神の還幸と行幸に伴い、通称賀来の大名行列といわれる「卯酉の神事」が行われる。柞原八幡宮と賀来神社を結ぶ約4キロの道程を、二百数十名の大名行列が御神体を供奉し、大道具・小道具を振りながら盛大に練り歩くものである。この神事は、鎌倉時代以降、柞原八幡宮に6年に一度調度品を奉納した大神宝調達という行列に由来するものと考えられている。江戸時代には村役人の指揮下のもと社役行列として行われていたとみられ、天保14年の「府内藩記録」にその記述が残っている。その後、明治維新ののち大給家より紋入り挟箱の寄進があったことをきっかけに、現在の大名行列の形態となったものである。県選択無形民俗文化財に指定されており、卯酉の年には大勢の参詣者を集める盛大なイベントとなっている。

参考文献

- 大分市史編纂委員会 1987『大分市史』上 大分市
若杉昭昭 1983「賀来の市の出小屋について」『国分寺地域の民俗』大分市教育委員会
加藤泰信 1983「賀来神社卯酉の神事」『国分寺地域の民俗』大分市教育委員会
大分市教育委員会 1992『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分市教育委員会 1994『賀来中学校遺跡』大分市賀来小学校屋体増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分市教育委員会 1993『大分市埋蔵文化財調査年報4』—平成4年度—
大分市教育委員会 2005『宮苑井ノ口遺跡』第2・第3次発掘調査報告書—大分市都市計画事業賀来西部地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—
大分市教育委員会 2008『宮苑井ノ口遺跡』第4次発掘調査報告書—マンション建設に伴う発掘調査報告書—
大分県教育庁埋蔵文化財センター 2005『賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡』県道小狭間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 調査の概要

賀来中学校遺跡第5次調査は、賀来中学校仮設校舎設置のための造成工事に際し水路の移設工事に伴い実施したものである。今回の調査では、弥生時代後期後葉頃に比定される土器埋設遺構・溝状遺構、中世段階に位置づけられる溝状遺構が確認された。調査地周辺では、賀来小・中学校の敷地内を対象に4次にわたる発掘調査が行われている。それらの調査成果から、弥生時代後期後葉～終末期の推定環濠跡及び中世前半期の居館跡の存在が想定されている。第5次地点は、弥生時代後期に該当する竪穴建物跡が、複数重複した状態で発見された第3次地点の北側に位置している。調査区は細長いトレンチ状を呈していることから、検出された遺構は調査区外へと延伸し、その全様については不明な状況のものが多い。

2. 基本層位

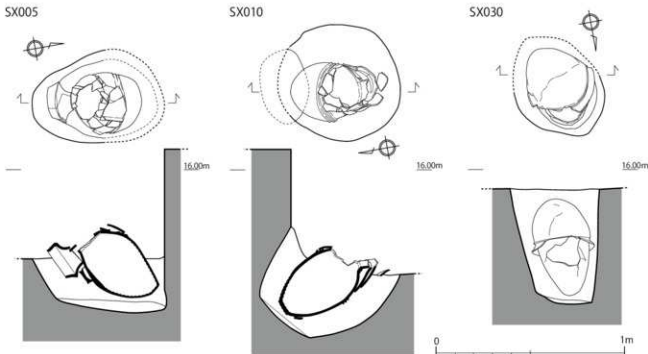
調査以前は耕地であったことから、表層には耕作土が認められる。耕作土を除去すると遺構検出面である茶灰色粘質土が確認される。試掘調査から、茶灰色粘質土は西から東、川の方角に向かって傾斜していることが看取される。第5次調査での遺構検出面の標高は約15mである。

調査地は、立会調査以前に深く掘削されており、表出した遺構も大きく削平を被っていた。遺構検出面も掘り下げられており、本来は報告内容より0.3m以上残存していたと推測される。

第2節 遺 構

SD001 (第5図)

調査区東端を北東から南西方向にかけて斜行する溝状遺構である。現状で、南北約2.0m、東西約1.2mを確認し、調査区外へと延びるため、溝の幅は不明である。南側に約13.2m離れた確認調査の4トレンチで検出した溝状遺構と、位置関係から接続するとみられ、また4トレンチからさらに南側に約13.0m離れた第1次調査のSD02とも接続すると推測される。今回の調査では、遺物は出土していない。



第6図 個別遺構実測図 (1/20)

SD015 (第5図・第8図3～5)

調査区東側を北東から南西方向にかけて斜行する溝状遺構である。検出面での幅は約2.8mを測り、主軸方向N-27°-Eである。位置関係から、第1次調査のSD01と、これに接続するとみられる第3次調査のSD01と同一の遺構になると考えられる。出土遺物は弥生土器壺の底部破片、器台とみられる破片、石皿の一部、その他弥生土器の小破片が出土している。土器の特徴より、弥生時代後期後葉の範疇で捉えられる。

SD025 (第5図・第8図6～8)

調査区西端を南北方向に延びる溝状遺構である。溝の東側掘方の一部を検出した。現状で、南北約17.4m、東西約9.3mを確認し、調査区外へと延びるため、溝の幅は不明である。賀来中学校周辺の地割(第9図)によると、田の区割と合致していた。出土遺物は、底部外側に糸切痕が残る土師器環の破片が2点、砥石とみられる小破片が出土している。出土遺物から、中世以降に位置づけられる。

SX005 (第6図・第7図1～3)

調査区東側北壁で検出された土器埋置遺構である。北側約1/2が調査区外へと延びるため全容は不明であるが、現状では、長軸約0.39+αm、短軸約0.48m、深さ約0.3mを測る。平面は楕円形状を、断面形状はやや袋状を呈し、底面は北側へと低くなる。遺構内部には、弥生土器壺が底面から約45度の傾斜をもって、底部を斜下方向にして埋置されていた。出土した壺は複合口縁壺である。壺は頸部と複合口縁部を切断しており、複合口縁部と脚付鉢(第7図1)の底部から胴部破片を支えとして下部に設置されていたと推測される。複合口縁部の開口部には別個体である壺の頸部から胴部上半部の破片で覆われ、その境目付近は、脚付鉢(第7図1)の口縁部から胴部にかけての破片でさらに被覆される。ちなみに、この破片はSX010から出土したものと接合する。土器内面の最下部にあたる部分に赤色顔料を含む付着物が楕円状に認められる。壺の出土状況及び土器の器高から小児棺墓と考えられる。壺の底部形状から弥生時代後期後葉頃に位置づけられる。

SX010 (第6図・第7図4・5)

調査区東側北壁で検出された土器埋置遺構である。北側約1/3が調査区外へと延びるため全容は不明であるが、現状では、長軸約0.53+αm、短軸0.60m、深さ約0.33mを測る。平面はほぼ真円形状を、断面形状は袋状を呈し、底面は北側へと低くなる。遺構内部には、弥生土器壺が2点合わせ口となり、底面から約40度の傾斜をもって、下部に位置する壺の底部を斜め下方向にして埋置されていた。下部の壺は頸部上から肩部にかけて、上部の壺は胴部中央付近を切断し、開口部を合わせて壺状にし、上部の壺の頸部から胴部の破片を支えとして下に敷き込み、斜方向に設置されている。図上では表示されていないが、下部には裏込め土を設置前に入れていたと推測される。接合部は、脚付鉢(第7図1)の胴部破片により一部が被覆される。下部の壺の内面の最下部において付着物が楕円状に認められる。上部となる壺は胴部の一部を帯状に欠損し、胴部上位に焼成後穿孔が認められる。壺の出土状況及び土器の器高から小児棺墓と考えられる。脚付鉢(第7図1)と壺(第7図5)は隣接するSX005とSX010の双方で確認され、接合することから、この二つの小児棺墓はほぼ同時期に埋設されたと推測される。壺の底部形状から弥生時代後期後葉頃に位置づけられる。

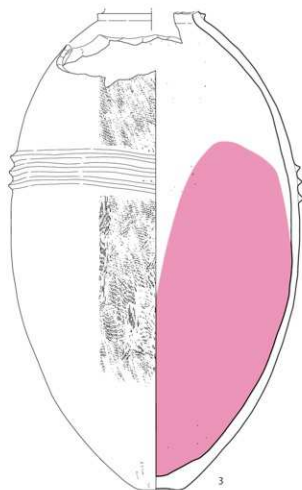
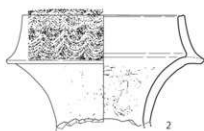
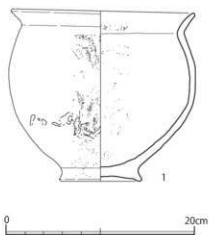
SX020 (第5図)

調査区東側で検出された。SX005・SX010・SX030に切られる。現状での幅約8.6m、検出面からの深さ約0.5mを測り、南側と北側は調査区外へと延びる。竪穴建物跡の可能性が考えられる。出土遺物は弥生土器壺の破片などが少量出土している。出土遺物から、弥生時代後期に位置づけられる。

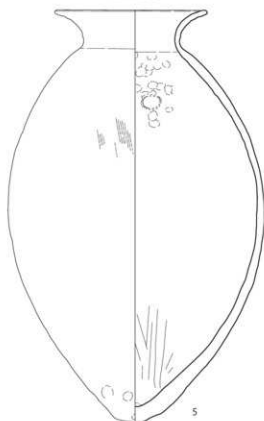
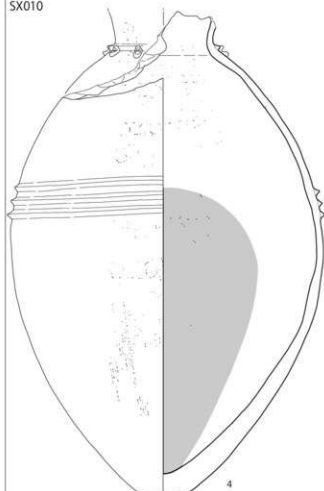
SX030 (第6図・第8図1・2)

調査区東側南壁で検出された土器埋置遺構である。南側1/2が調査区外へと延びるため全容は不明であるが、現状では、長軸0.48m、短軸0.30m、深さ0.61mを測る。平面はほぼ真円形状を、断面形状は東側側面がやや傾斜するが、逆台形を呈し、底面は西側へと低くなる。遺構内部には、弥生土器鉢と甕が2点合わせ口となり、ほぼ垂直に埋置されていた。上部は鉢・下部は甕で、掘削の際の重機による割れがみられるが、ともにほぼ完形である。図上では表示されていないが、下部には裏込め土を設置前に入れていたと推測される。上部の鉢を下部の甕にかぶせる際に、接合部にあたる甕の胴部外面を、白色粘土で目張りしている。下甕の内面胴部下位には赤色顔料が付着しており、口縁部には2か所打ち欠けがみられる。外面肩部を境に煤の痕跡が明瞭に区別される。出土状況及び土器の器高から小児棺墓と考えられる。鉢の底部形状から弥生時代後期後葉頃に位置づけられる。

SX005

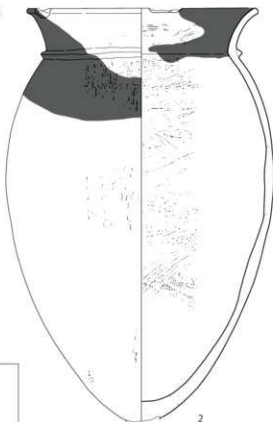
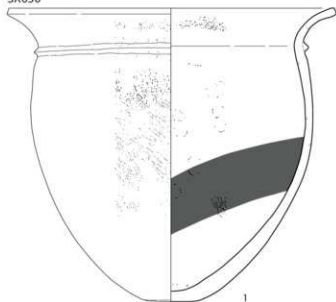


SX010



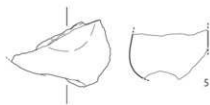
第 7 図 SX005・010 出土遺物実測図 (1/4)

SX030



0 20cm

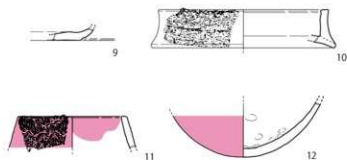
SD015



SD025



表土



確認調査



第8図 SD015・025・SX030・表土・確認調査出土遺物実測図 (1/4)

第1表 出土遺物観察表

図版 番号	遺構 番号	種別	器種	注量 (cm) () は復元数値				胎 土	色 調		調 整・装 飾		備 考	
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚	重量(g)		内 面	外 面	内 面	外 面		
7-1	SX005	弥生土器	鉢	19.5	18.3	8.7	—	角閃石・金雲母	明黄褐色	淡黄褐色～褐色	ハケ後ナデ・ヨコナデ・工具ナデ・指オサエ	縦方向のハケ目・ヨコナデ・指オサエ	黒斑あり 外面スス付着	
7-2	SX005	弥生土器	壺	17.0	12.1+α	—	—	角閃石・長石・金雲母	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・波状文・ハケ目	頸部に打ち欠きあり 第7図3と同一個体	
7-3	SX005	弥生土器	壺	—	50.8+α	3.9	—	角閃石・雲母	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指オサエ・工具ナデ	ヨコナデ・貼付突帯・ハケ目・ナデ	内面に赤色顔料付着 内面に付着物あり 外面に黒斑あり 肩部～頸部に打ち欠きあり 胴部最大径 31.2cm 第7図2と同一個体	
7-4	SX010	弥生土器	壺	—	51.2+α	4.4	—	角閃石・長石	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指オサエ・ナデ・ハケ目	ハケ目・ヨコナデ・貼付突帯・浮文・ナデ・指オサエ	外面に黒斑あり 内面に付着物あり 肩部～頸部に打ち欠きあり 胴部最大径 33.6cm	
7-5	SX010	弥生土器	壺	(16.1)	43.9	—	—	角閃石・石英・白色粒子・赤色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	工具ナデ・ヨコナデ・指オサエ	ハケ後ナデ・ヨコナデ・指オサエ	黒斑あり 焼成後穿孔 胴部最大径 27.1cm	
8-1	SX030	弥生土器	鉢	34.5	31.0	5.9	—	白色粒・角閃石・長石・砂粒	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコナデ・ハケ目・ナデ・指オサエ	ヨコナデ・ハケ目・貼付突帯・指オサエ・ナデ	内面環状にタール付着 外面は被熱のためか調整・器面が摩耗している	
8-2	SX030	弥生土器	壺	24.0	44.0+α	—	—	角閃石・長石・白色粒・石英	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ・指オサエ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・指オサエ・貼付突帯・ミガキ・ハケ目	内面頸部下に赤色顔料付着 内外面にタール付着 外面に煤の痕跡あり 口縁部2ヶ所に打ち欠きあり 胴部最大径 28.3cm	
8-3	SD015	弥生土器	壺	—	2.9+α	2.7	—	角閃石・長石・金雲母・白色粒子・赤色粒子	淡黄灰色	淡黄白色	工具ナデ・指オサエ	ナデ	黒斑あり	
8-4	SD015	弥生土器	器台か	—	4.4+α	—	—	角閃石・長石・白色粒子・赤色粒子	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
8-5	SD015	石製品	石皿	10.6+α	7.1+α	8.3	505.0			灰褐色				
8-6	SD025	土師器	杯	—	1.3+α	—	—	長石	淡黄白色	淡黄白色	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り		
8-7	SD025	土師器	杯	—	0.8+α	—	—	角閃石・石英	淡黄色	淡黄灰色	回転ナデ	回転糸切り・回転ナデ		
8-8	SD025	石製品	砥石	2.6+α	1.3+α	0.5	3.23							
8-9	表土	土師器	杯	—	11.3+α	—	—	角閃石・石英・長石・白色粒子・赤色粒子	明黄褐色	明黄褐色	調整不明瞭	回転ナデか		
8-10	表土	弥生土器	壺	(18.0)	4.0+α	—	—	角閃石・長石・白色粒子	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ	櫛波状文・ナデ	安国寺式	
8-11	表土	弥生土器	壺	(11.6)	3.4+α	—	—	角閃石・白色粒子	淡黄灰色	淡黄褐色	ナデ	櫛波状文・ナデ	内・外面に赤色塗彩一部残存	
8-12	表土	弥生土器	壺・鉢	—	5.9+α	—	—	角閃石・長石・白色粒	淡褐色	赤褐色	指オサエ	調整不明瞭	外面に赤色塗彩	
8-13	確認調査	弥生土器	鉢か	—	1.8+α	—	—	角閃石・長石・白色粒子	赤色～淡黄白色	淡黄褐色	調整不明瞭	調整不明瞭	内面に赤色塗彩一部残存 第8図14と同一個体か	
8-14	確認調査	弥生土器	鉢	—	8.7+α	—	—	角閃石・長石	赤色	赤色	ヨコナデ	突帯貼付・ヨコナデ・ハケ目	内・外面に赤色塗彩	
8-15	確認調査	弥生土器	鉢	—	3.7+α	—	—	角閃石・長石	赤色	赤色	ナデ	突帯貼付・ナデ	内・外面に赤色塗彩 第8図14と同一個体か	
8-16	確認調査	弥生土器	鉢	—	2.8+α	—	—	角閃石・長石・石英・白色粒子・赤色粒子	淡褐色	淡黄灰色	ナデ	ナデ・指オサエ	黒斑あり	
8-17	確認調査	弥生土器	鉢か	—	3.2+α	—	—	角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子	赤色	赤色	ミガキ	ミガキ	内・外面に赤色塗彩	
8-18	確認調査	石製品	石皿	9.1+α	11.8	5.2	640			灰褐色				

第四章 総括

今回の調査地を含む賀来中学校遺跡は、上流から流れる大分川が逆「つ」字状に屈曲する部分、いわゆる河川の攻撃面にあたる。第1図の地形分類図を見ると遺跡が存在する地点は、三方を流路に囲まれた島状の自然堤防の上に立地していることが分かる。

大分川からやや内陸側に位置する第1次調査^(註1)では、複数の竪穴建物跡群が確認されている。竪穴建物跡群は、主軸方向から大きく2グループに区分される傾向が看取される。第1次調査区を、未掘削部分を中心として東と西に分けると、東側では主軸をやや西に傾けた一群が、西側では主軸を東に傾くグループが分布する。東側グループは、その配置状況から竪穴建物跡群の西にある1SD02に規制を受けたと推測される。一方、西側グループは第3次調査の1号溝(以下、3SD01とする)に規制されたと考えられる。このように仮定した場合、それぞれの溝跡出土資料^(註2)より、東側グループが古墳時代前期、西側グループは弥生時代後期中葉～後葉頃として捉えられる。

第1次調査では、9基の土器棺墓も併せて確認されている。土器の組み合わせは壺×壺、壺×鉢の2種類がある。棺に使用された弥生土器壺の底部形態を観ると安定した平底が多く認められることから、大分平野の土器編年上、弥生時代後期後葉頃に該当するものと判断され、土器棺墓群は西側グループに帰属する可能性が極めて高い。また、土器棺墓は竪穴建物跡群の北側の遺構分布が希薄なエリアにおいて、新旧関係が生じない状態であったことから墓域の存在が指摘されている。

第5次地点は、第1次調査の北側約30m離れた地点に位置する。確認された遺構は、小児棺墓と推測される土器埋設遺構が3基、溝状遺構2条などがある。土器埋設遺構に関しては、SX005とSX010で上棺や棺の支えとして使用された土器に接合関係が認められたことから、両遺構は近接した時期に構築されたことが想定される。土器の組み合わせは、壺×鉢、壺×鉢、壺×不明(削平のため)といった状態であったが、本遺跡内において、棺に壺を使用している事例は初見である。土器をみると、底部形態はほぼ平底で、胴部形状は倒卵形を呈するものが多く、第7図3・4にある複合口縁壺は胴部に3条の凸帯が付けられている。第8図1・2の鉢、壺の頸部にも1条三角凸帯が認められる。これらの特徴は第1次調査で発見された土器棺墓の出土資料と類似しており、ほぼ同時期に造営されたと推測される。また、第5次地点が所在する敷地内では、仮設プレハブ校舎建設に伴う確認調査を行っており、その際、第3トレンチで鉢と壺又は壺の合わせ口タイプの土器埋設遺構が1基検出されている。土器の大きさから小児棺墓と判断される。

次に土器棺墓の分布を見ると、多くは3SD01に沿って配置をしている状況が看取される。また、出土数が限られるが、第1次調査区の北西隅部に4基がまとまっており、その南側に7mの遺構が希薄なエリアを挟み土器棺墓がもう1基認められる。また、周辺には出土遺物が無いために時期不明の土壌層が、土器棺墓と同様、3SD01と並行するように配置している。これらのことから、竪穴建物跡群と3SD01の間に広がる敷地は墓域として土地利用された可能性が考えられ、その墓群は集落を区画する溝沿いに細長く造営されていたと推定される。

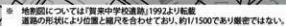
弥生時代後期、古墳時代前期の集落をそれぞれ区画する溝(1SD02・3SD01)であるが、規模や断面形状、竪穴建物跡群との位置関係等から環濠となることが想定されている。第9図を見ると、3SD01を南東方向へと延伸した場合、第2次調査の2SD01もしくは2SD04に接続すると考えられる。その先には、図中の「脇」と記された部分の下に旧流路跡のような歪な形をした土地区画が存在し、南には区画も兼ねた道路がある。上記の溝の延長部がこの道路に繋がるとすると、その先の延長部は旧河川に結節することになる。1SD02についても同じ様な状態が見られる。よって、賀来中学校遺跡に形成された集落は、流路に囲まれた空間を巧みに利用し環濠を造作した可能性を指摘しておきたい。

(註1)「賀来中学校遺跡」

大分市教育委員会 1992

(註2)「大分市埋蔵文化財調査年報4」

大分市教育委員会 1993



第9図 賀来中学校遺跡調査区全体配置図 (1/1,500)

写真図版 1



賀来神社から賀来小中学校を望む（北東より）



調査区遠景（北より）



調査区全景（東より）



調査区全景（北より）



SD020 北壁土層検出状況（南より）



SD001 南壁土層検出状況（北より）



SX005-010-SD020 検出状況（西より）



SX005-010 検出状況（南より）



SX005 検出状況① (東より)



SX005 検出状況② (南より)



SX010 検出状況① (西より)



SX010 検出状況② (東より)



SX005 鉢埋設状況 (東より)



SX005 完掘状況 (南より)



SX010 完掘状況 (南より)



SX005・010 完掘状況 (南より)

写真図版 3



SX030 検出状況（北より）



SX030 遺物出土状況（北より）



SX030 下葬埋設状況（北より）



SX030 上墓内側目ばかり状況（北より）



SX030 完掘状況（北より）



確認調査 調査区遠景（西より）



確認調査 3 トレンチ土器埋設状況（東より）



確認調査 4 トレンチ南壁環濠跡土層写真（北より）



第7図2



第7図3 (内面)



第7図3



第7図4



第8図1



第8図2

報 告 書 抄 録

ふりがな	かくちゅうがっこうせき4							
書名	賀来中学校遺跡4							
副書名	第5次調査 仮設校舎設置のための造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	佐藤道文 佐藤麻理子 株式会社双林社（業務担当者 森 一博）							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111 FAX (097) 536-0435							
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
かくちゅうがっこうせき 賀来中学校遺跡第5次	おおいだしとおおざかく 大分市大字賀来	44201	201067	33° 12' 24"	131° 33' 36"	20120131～20120207	142	仮設校舎建設
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
賀来中学校遺跡第5次		集落ほか	弥生・中世	溝・土器棺墓		弥生土器・土師器		
要約		今回の調査では、弥生時代後期の溝2条と小児用と考えられる土器棺墓3基が確認された。これまでの第1～4次調査において、集落をめぐる環濠と墓域にあたる土器棺墓群が確認されている。今回確認した溝のうちSD015は第3次調査で確認された環濠の延長と考えられ、SD001は第1次調査で確認された環濠の延長である。また第1次調査で確認された土器棺墓群が今回の調査でも確認されたことは、墓域が北側へと広がることを示唆している。						

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第126集

賀来中学校遺跡 4

賀来中学校遺跡第5次調査

—仮設校舎設置のための造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2013年3月15日

発行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2-31